蔵書・現代社会学 ② 仕事と生活
—労働社会の変容—

本書は、「ワーク・ライフ・スキル」という著者のオリジナルな概念を分析の軸として展開する、現代社会の男性の「仕事と生活」研究である。

広義の「ワーク・ライフ・スキル」という概念は、企業における従来の考え方を新的方向性として、労働者自身が主体的に生活の場で求める能力を意味する。「ワーク・ライフ・スキル」の概念は、この概念がいかにポスト近代社会において必要とされる能力であるかを分析・提示している点が本書の第二の特徴である。

本書の構成を示しておこう。全体は二部からなっており、第一部は副題にある「労働社会の変容」を戦後の研究史の流れの中から明らかにしようとするものである、その際著者は、ソプラノが健康な音色・楽器の生活を規定している社会階層（階級）の動向がどのようにとらえられてきたかに注目しながら、社会科学が対象とした生活問題を整理した。第1章では、第1節（1960年代まで）における生活研究が伝統的な貧困研究であったことを示す。同様に、第2章（1960年代から80年代初頭）では高度経済成長と社会階層の単一化が、第3章（1980年代半ばから80年代後半）では高度経済成長後の労働と生活の再編が、第4章（1990年代から2000年代初め）では多様化と格差が論じられてきたと述べる。第2章では、1990年代後半から現在に焦点をあて、労働世界におけ

三具 淳子

2010年、ミネルヴァ書房、ISBN978-4-623-05900-3、定価（本体3,000円＋税）
書評

た。第 6 章では、現役時代に獲得されたワーク・ライフ・スキルが定年後の社会参加をも規定する点、第 7 章では、大学生を対象としたデータから、学生から職業生活へのスムーズな移行、ワーク・ライフ・スキルの構成要素の一つである対人スキルが重要であることが示された。最終章となる第 8 章では、以上より、ワーク・ライフ・スキルが労働者の関係性の貧困を克服する鍵となること、さらに、社会的貧困を乗り越えるためには、異なる労働形態を組み立てる垂直的ネットワークの構築と職場における対話が重要であるとの見解が示された。

ここで、ワーク・ライフ・スキルを向上させる点は、関係性の貧困を克服する重要な鍵であるという本書の仮説 (p. 108) は検証されたのかを考えてみたい。著者は、ワーク・ライフ・スキルを把握するために①専門的職業能力、②部下の育成能力、③会社人脈の構築と蓄積、④会社との距離・独立志向、⑤生活感覚の維持とワーク・ライフ・バランス志向の 5 項目についてその行動の程度を調査する方法をとっている。これら 5 項目は、どれか一つの項目の得点が高いための内の一貫性が保たれており、ワーク・ライフ・スキル変数は測度の精度も高いためである。そのためにあって、第 4～7 章のそれぞれで提示された仮説は、いずれも手間をかけない分析によっておもしろいように次々と検証されていく。評者は、各章ごとに著者の主張に納得した。しかし、本書全体を通してみると、立ち止まって考えるべき点があるように思われた。

第 2 章で著者は関係性の貧困（＝社会的孤立）に直面している層はとりわけ非正規労働者に多いことを指摘しているが、この層に対して果たしてワーク・ライフ・スキルが関係性の貧困を克服する鍵となりえるのだろうかという点である。ワーク・ライフ・スキルとは、「比較的長い職業キャリアの中で習慣的に形成されていく能力 (p. 89)」であり、前述のように「部下の育成能力の蓄積」と「会社人脈の構築と蓄積」によって測定されるものである。それでも非正規労働者にその能力を獲得するチャンスは開かれていない。第 4 章でも著者自身が非正規労働者のワーク・ライフ・スキルが低いことを明らかにしている。とすれば、ワーク・ライフ・スキルを「失われた関係性を回復する手立てとして (p. 85)」考えることは難しく、正規の労働者が関係性の貧困に陥らないための手立てとして定義的に理解することが必要ではないだろうか。

評者が冒頭で本書を男性の「仕事と生活」研究であるとしたとのことに関連している。第 4～6 章の分析が男性のみのデータによることだけを指摘しているのではない。上記と同じ理由から、動く年数の長い安定的な雇用にある男性に適合的なワーク・ライフ・スキルという概念を、M 字型カーブとパート労働を特徴とする女性、とくに既婚女性の仕事と生活の分析に適用することが可能だろうかとの疑問をもったためである。

とはいえ、变形する労働社会が人との社会的孤立を招くという著者の危機意識は、共有されなければならないだろう。労働条件の改善は当然必要であるが、それとともに労働者自身、なかでもときに非正規労働者の対応力をどうやって養うのか、それにはどのような支援が必要なのかといった次回の課題が本書によって示されたように思う。